

「どうもありがとやした。」

と言って、スタスタと立ち去っていっただど。

たまげたのは、長者様ちやうじやさまで、まさか一年分の稲束いなたば全部持っていがれつとは、思ってもみながつたので、長者様ちやうじやさまはがつかりして、床とこに就ついてしまうようになっただど。

それから、長者屋敷ちやうじややしきは、一年、二年と過ぎるうちに、家の運がかたむき、いつしか家がつぶれてしまっただど。

今、その屋敷跡やしきあとには、稲荷様いなりさまが残のこっているだけだど。